



## たげ 旧伊勢本街道と多気

美杉地域を通る旧伊勢本街道は、かつて大和と伊勢を結ぶ主要な幹線の一つでした。道中は峠が多く険しいものの伊勢への最短経路として利用されることも多く、街道沿いには石名原・奥津・多気の宿場がありました。その経路は国道368号と重複したり交錯したりしながら東西に延びていて、交通路としての機能は国道に移りましたが、今も生活道として利用されています。

多気は、かつて伊勢国司北畠氏の本拠であり、現在北畠神社となっている場所に当主の館が築かれ、その周辺には城下が広がっていたと考えられています。戦国時代の永禄元(1558)年8月には、京の公家であった山科言継が、朝廷儀式の資金を集めるために有力者を頼って、伊勢国では一身田の専修寺と多気の北畠具教を訪ねています。その時の多気までの経路について、当時言継自身が書いた日記の「言継卿記」には「イサワ」(現射和)や「大石」など現在の松阪市の地名が記されています。大石から多気、その後は「曾迹」(現曾爾村)、「南都」(現奈良市)を通過して、後に整備される伊勢本街道とほぼ同じ道をたどっています。

江戸時代になると多気は宿場町として発展します。関西方面と伊勢方面からの往来が盛んになり、多くの人がこの行き交いました。

明和9(1772)年には、本居宣長が吉野への花見の帰り道、この街道を通っています。その様子は「菅笠日記」に詳しく書かれていて、3月14日朝に「石な原」(現石名原)を出発し、飼坂峠を駕籠で越えて多気に着いています。先祖が北畠氏の家臣であった宣長は、真善院に残る北畠氏の庭園を訪れたり、地元の家を訪ねて城下の絵図や北畠氏の家臣録を見たり、調査に夢中になっています。松坂への帰路は、櫃坂峠を越える伊勢本街道では遠回りとなるため、健脚な宣長は下多気から白口峠を越え、その日のうちに自宅まで戻りました。

旧街道沿いの家並みなど当時の面影を感じつつ、谷川を流れる水に一服の涼を求めながら、いにしへの道を歩いてみてはいかがでしょうか。



北畠氏館跡庭園



多気の家並み

